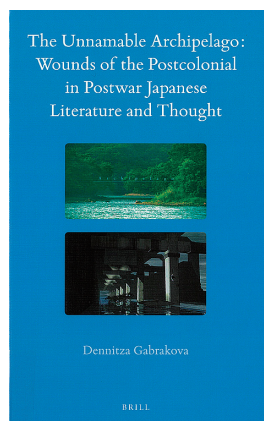


デンニツァ・ガブラコヴァ

『名指し得ぬ列島——戦後日本文学・思想における
ポストコロニアルの傷』Dennitza Gabrikova, *The Unnamable Archipelago: Wounds of the
Postcolonial in Postwar Japanese Literature and Thought*

今福龍太



Brill, 2018

私が、本書にたいしては、一般的な意味での「書評」を書く立場にはないことをまず断わっておかねばならない。客観性などといった便宜的で曖昧な概念を持ち出すつもりはないが、私にとつて本書は、そのようなかたちで対象化し、距離を置いて批評することのできる本ではない。本書全体を貫くかたちで「群島」という私自身の思想的ヴィジョンが創造的に受けとめられ、翻訳・引用され、体系的で学術的な文脈において議論されていること。そうであれば、それにはたいして私がいまここでできるのは、思想的意思を共有する優れた同志であり媒介者である著者にたいし、感謝も込めた親愛と敬意と期待の思いを、著者のこれまでの弛まぬ努力とこれからの思考の展開に向けて静かに表明することであろうか。まずなによりも、本書の著者が、これほどまでに綿密に、精緻

に、そして包括的に、私が探究してきた「群島」にかかわる諸著作を深く読み込み、それを広い文学思想的な文脈へと架橋し、さらにそれを英語環境（すなわち一般的な意味での国際的なアカデミック言語の環境）のなかに誘導しながら克明に論じている、という事実の持つ重要性は特筆すべきであろう。著者がさまざまな箇所で（ほとんど情熱的ともいえるほどの精緻さと几帳面さとともに）参照し、引用し、みずから翻訳して読者に媒介しようとしている私の著作は、「群島」のヴィジョンがもつとも包括的に論じられている『群島・世界論』（岩波書店、二〇〇八）はもとより、それに先行する『時の島々』（岩波書店、一九九八。写真家東松照明氏との共著）や『アーキペラゴ』（岩波書店、二〇〇六。詩人吉増剛造氏との共著）、さらに「群島響和社会（平行）憲法」や「タブ

ロー・グリッサン」を含む『わたしたちは難破者である』（河出書房新社、二〇一五）など多岐にわたる。私自身、これらの日本語著作に結実することになる思考とその展開を、アメリカ（デューク大学）、イギリス（ロンドン大学）、ドイツ（ライプチヒ大学）、ブラジル（サンパウロ大学、サンパウロ・カトリック大学、ブラジリア大学）、韓国（成均館大学）、台湾（台湾大学、中興大学）等で、すでにこの二〇年近くにわたって語り、各地の研究者や聴衆とのあいだで活発な議論の交換を行ってはきた。だがそうであつても、日本語で書かれた著作の世界的浸透力には限界があることは否めない。日本の近現代文学を専門としてきた著者が、その領域の外縁部に、内向きの日本研究を解体・活性化させる「群島」の主題を発見し、それを英語においてはじめて広く世界に向けて発信したことの意義はきわめて大きいといわねばならない。そしてこの「群島」の主題を、大庭みな子、有吉佐和子、日野啓三、池澤夏樹、島田雅彦、多和田葉子といった、その創作的主題においても、また個人史的な境遇においても、群島的な移動を生きてきた現代作家たちへのあらたな接近の方法として提示することで、著者は「群島」のヴィジョンを介してふたたび日本文学研究へと立ち戻り、そのあらたな可能性を示唆することに成功している。外形的に与えられてきた研究領域や専門性の枠組みを離れ、「日本研究」のディシプリンの蓄積と限界を内在的に引き受けつ

つ、その自明の学術的圏域から離脱して「名づけえぬ群島」（「日本」なる因習的言説が見えなくさせるもの、「日本」ならざるもの）へと思考を拓いてゆこうとした著者の果敢な意思は、なによりも貴重なものといわねばならない。

ここで、著者の議論の、繊細かつ大胆な読みを含む細部に立ち入る余裕はない。しかし理論的な記述に関していえば、私の提示した「群島」のヴィジョンをポストコロニアル思想の核心と接続するために、エドワード・サイード、ホミ・バーバ、ガヤトリ・スピヴァク、トリン・T・ミンハといった刺激的な理論家たちの仕事と照らし合わせてゆく手際は啓発的である。また、著者の読みの鋭敏さは、たとえば、『群島―世界論』において私が決定的な靈感源として論じたカリブ海の詩人たち、とりわけデレク・ウォルコットとエドゥアール・グリッサンの詩作品をめぐる考察をつうじて、それが「カリブ海」という実体的な意味での群島世界が示唆する、思想的ヴィジョンとしての「群島性」を発見するための手続きであつたことを、非常に精確に読みとつている点にも求められる。従来の文学的なテクスト研究が立ち入ることのできなかつた、詩的言語の物質性と神話性と形而上学とが出合い混交する界面を、著者は鋭敏にとらえることができているのである。それはまた、私の「群島響和社会（平行）憲法」のなかで語られている「詩は大陸から切断された島である」という意表をつく

テーゼにたいする著者の深い理解にも見られる。このテーゼは、まさに群島のヴィジョンを駆動させるエンジンに、文化の口承性の根を豊かに維持する「詩」が存在すること、すなわち言語生態としての「詩」の特権性を宣揚するために提示されたテーゼにはかならない。「詩」が比喩的な意味で「島」であることは、「小説」を主体とする散文世界が大陸原理をいまだに引きずりながら生産されていることを暗に示唆しており、その言説から切斷されることによつてはじめて「詩」を媒介に私たちが「群島」世界へと参入できる可能性がここで探究されている。そうした詩の言語態としての可能性を私は群島の「舌」*langue*でもあると書いたが、この「詩」というヴァナキュラーな「舌」を通じた群島論のヴィジョンナリーな啓示への深い読みが、著者をして、文字言語に「舌」の分節の苛烈な痕跡を探り続けるきわめて群島的な作家、多和田葉子の文学実践への議論へと正しく導かれていく部分も、本書の刺激的なパートである。

本書の結論部分で、著者はふたたび私の『群島―世界論』における、もつとも詩的喚起力を備えた冒頭のテーゼ「汀を媒介に現代の時空間を反転させれば、世界は群島だ」という一節を“*If we reverse the contemporary space and time through the coastline, the world becomes archipelago.*”と翻訳引用しながら、そこでの群島世界への思想的ヴィジョンが、キューバ出身の作家・批評家アント

ニオ・ベニテス・ロホによる影響力ある理論書『反復する島』*The Repeating Island* (デューク大学出版社、一九九二)が提示した視点と響き合っていることを説得力を持って論じている。カリブ海のコロニアルな歴史とポストコロニアルな現実への深い自省をもとに、そこから、中心も境界もない「メタ群島」*meta-archipelago*としてのカリブ海の思想的喚起力を透視しようとしたベニテス・ロホの思考は、私にとつても大きな刺戟の一つであった。ベニテス・ロホはこのメタ群島の喚起的な力を「カオス」とも呼んだが、それはまさに自らをたえざる差異化のエネルギーとともに反復する島々の謂であった。私自身が『群島―世界論』において、詩的ヴィジョンと造語的感受性を介さねば伝えられなかったのも、まさにこの「カオス」の運動そのものなのである。

そうした視点から編み出された私の、群島の語彙の一つに「放擲」^{てき}があつた。それは単に捨て去つて省みないという冷淡な「放棄」ではなく、島々がまさに相互に距離をとりながら配慮しあう群島の様態として、「離れつつ結びあう」関係性を示唆するため採用された語であつたが、著者が本書でこの「放擲」を“*relinquishment*”と訳していることに、私は深い思索の跡を感じざるをえなかつた。“*relinquishment*”には、繊細な配慮のもとに「断念する」というニュアンスが含まれており、それはたんなる「放棄」を超える、深い意味論的な彩をかかえた概念であるように思

われる。この、勇氣を持つて創造的に手放し、その手放したものの消息を配慮し続けることを意味する「放擲」を、私は“abandoning”というやや奇異な造語、すなわち“abandon”（捨てること）と“abundance”（豊かさ）と“dancing”（踊ること）を組み合わせた一語として語ることが多かった。けれどこれからは著者に倣って、“relinquishment”という陰翳ある語も使っていこうと思う。それは思索することの謙虚さをも意味し、同時に、一つの個別の土地とそこで生まれた思索が、つねにすでに、どこか別の土地と別の思索とに（群島状に）結びついていることへの信頼へと導かれるだろう。

最後に述べておきたい。本書を読むことを通じて、私自身が世界に向けて問いかけ、また実践してきたことが、ある種の「群島的なアンガー・ジュマン」とでも呼ぶべき思想行為でもあったのではないかと気づかされた。本書で著者は、私とフランス文学思想家の鶴飼哲氏の著作とを往還しながらさまざまに刺激的な読解を行っているが、その鶴飼氏の著書『抵抗への招待』（一九九七）の最後に、エドワード・サイードからのこんな引用があった。「知識人の任務とは、危機を明確に普遍的なものにすること、特定の人種や民族の苦悩にいつそう大きな人間的規模を付与すること、その経験を他の人々の苦悩と結びつけることであると私は信じてゐる」（Edward Said, *Representations of the Intellectual*, 1994）。たしか

に私の「群島論」もまた、このサイードの、深い思想的アンガー・ジュマンへの確信に支えられている。

そしてもう一人、おなじ世界群島の住人として私がたえず立ち還る批評家スーザン・ソントグの、おなじ確認に支えられた一節を引用して終わろう。ブルガリアから離散し、東京、香港、ニュージーランドと移動をつづけながらつねに「ここ」と「あそこ」を同時にまなざし、分け隔てなく思考しようとする倫理のなかに生きているであろう著者に向けて。

「今」が「ここ」と「あそこ」の両方を指していることは、
経験の基本的構造に組み込まれていないのだろうか？
（……）こちら側では、わたしたちはここにいて、今のところ
繁栄し、安全で、飢えたまま床につく恐れもなく、また、
今夜爆破される心配もないに等しい……だが世界の別の場所
なら、いつ、なんどき……グロズヌイ、ナジャフ、スーダン、
コンゴ、ガザ、リオの貧困地区フアゲエーラのどこかで……。

（……）私は答えよう。だからフィクションが必要なのだ
—— 私たちの世界を拡張するために。

(Susan Sontag, *At the Same Time*, 1997)